



～ ブルックナーの森～

ブルックナー（1824～1896）はオーストリアのリンツ近郊のアンスフェルデンで生まれ、若いころから教会のオルガニストとして活躍した。しかし、作曲家としての本格的な活動は44歳の時にウィーンに移り住んでからで、かなりの遅咲きと言える。非常に敬虔なローマ・カトリック教徒であった彼の音楽は、宗教的な雰囲気や自然への愛にあふれたものだが、これは個人の感情の表現を重視する当時のロマン派音楽からは特異な存在であった。また彼の11曲ある交響曲は、そのほとんどが60分を超える長大な作品である。こうしたことから、ブルックナーの作品は一般的な音楽ファンからは敬遠される節もあるようだが、その純粹無垢な音の世界は、一度入り込むと抜け出せなくなる巨大な森のような音楽である。

ブルックナーの交響曲第4番は1874年に作曲され、その後いくつかの改訂がなされた。「ロマンティック」というタイトルは作曲家自身が名付けたもので、牧歌的で親しみやすい曲想、比較的短い演奏時間から（それでも65分程度だが）、彼の最も人気のある作品といえよう。第1楽章は夜明けの森の深い霧のような弦のトレモロから始まり、やがて金管楽器による輝かしい朝がやってくる。第2楽章は深い森の中での祈りの音楽で、第3楽章は狩りのスケルツォとウィンナ・ワルツの前身であるレントラー舞曲風のトリオである。第4楽章で自然への賛歌や宗教的な感動による荘厳で壮大なフィナーレを迎える。

ブルックナーの長大で重厚な交響曲に対して、ビゼーの交響曲は簡潔で軽やかな作品である。「カルメン」や「アルルの女」で有名なフランスの作曲家ビゼー（1838～1875）は、17歳のパリ音楽院の学生時代にこの交響曲を作曲した。その後2つの交響曲が作曲されたが、これらは作曲家自身が破棄したようで残っておらず、そのため1曲しかないこの交響曲を「第1番」と呼ぶこともある。

古典的な4楽章形式で書かれているが、「アルルの女」でも示されたような南フランスの明朗で田園的な色彩感にあふれている。爽快な風のような第1楽章、ミレーの「晩鐘」を思わせる美しい第2楽章、田舎の舞曲風の第3楽章、快活な第4楽章からなり、ビゼーの若き天才ぶりが遺憾なく発揮された作品である。同じロマン派の交響曲でありながら、ブルックナーの作品との違いを楽しんでいただけたらと思う。

（インスペクター 藤井 孝宏）

広島市民オーケストラ

広島市民オーケストラの前身である「広島JMIオーケストラ」は、1979年に「第36回青少年音楽祭」が当地で開催された際に、設立をされたものです。音楽祭のためのオーケストラは通常、音楽祭の終了とともに解散するのですが、広島においては音楽祭終了後も、アマチュアのオーケストラとして活動を続けていくこととなりました。

1994年11月に開催された「第66回青少年音楽祭」の後、これまで以上に地域に密着した市民参加型のオーケストラとして音楽活動を展開していこうという機運の高まりを受け、1995年に「広島市民オーケストラ」と名称を改めました。

団の音楽活動としては40年を越えましたが、スプリングコンサートや定期演奏会、県内各所でのミニコンサートなど、これからも地域に根ざした音楽活動を続けていきたいと考えております。



指揮者
井田 勝大